

＜北海道熊研究会 会報＞ 第65号 2017年 2月 22日

ご意見ご連絡は下記の email へどうぞ

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～64号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

今も、無益な、動物を苦しめての、電波発信器を装着しての、調査とやらが、日本のあちこちで行われている実態を、皆さんは、どうお考えになりますか。

＜電波発信器装着での熊調査について＞

熊の生態(生活状態)調査と称し、目的とする熊(個体)の位置を容易に捕捉する爲に、熊の首に横幅 5 ㎝もあるバンドを着け、それに弁当箱ほどの重い電波発信機を常時一年も二年もあるいは死ぬまで着けっぱなしでの調査が、己さえ良ければ、対象生物に苦痛を与え続けても構わないと言う米国やカナダの研究者の真似をして、1977年から北海道でも北大の連中が主体となり熊調査の基本として為され、今も熊調査手法の本流として、知床などで広く多用され続けているが、この手法は検体個体に、本来身体に着いていない物を、着け続ける事で、甚大な負担を掛け続けていると言う点で、私はこの手法に反対である。本来身体に付随していない物を着ける事は、容積、重量いずれでも、負担になるものである。生態調査の基本は対象個体に負担を課さない状態での実視観察が基本で、これに勝る方法は無いと言いたい。任意の日時に検体を容易に捕捉し得ると言う事で、発信器を装着しているのだが、私から言わせれば邪道である。何処にいるか分からない対象個体を、捜しながら山野を跋渉し、探し当てる事、そしてその過程で得られる地理的知見と他種生物に関する知見は、対象個体の生態と其の地域の生態系全体を吟味識る上で多量の示唆を与えて呉れるし、対象個体の心も分かって来る。野生動物の調査は、対象動物に負担を掛けず行うことが基本である。まず己の首ないし家族の者の首に同じ物(発信器)が常時一年も二年も着けられての日常生活を想像して見よと言いたい。そんな調査は、北海道で人と熊が共存するための調査としては不要である。まず、熊のあらゆる事象に関し、手間暇掛けて、検証調査を繰り返さないと言いたい。40年も前から熊の首に電波発信器を着けの調査が北海道で行われ続けているが、その結果から、何か人と熊の益となる事、例えば人身事故の防止策や人と熊の軋轢を減じる策など、何か発信器装着調査を行っている者から提起されているかと言えば、そう言う事は一つ公表されていない。公表された事と言えば、「思ったより、熊の行動域は広がった」とか、「どこそこまで熊が移動していた」とか「何時の時

季はどこそこを多用していたとか」、言う事ぐらいである。この程度の知見は発信器に頼らずとも、きめ細かい実視調査を為していれば分かる。ましてや、公費でのこの類の調査は、税の無駄使いである。

発信器装着で熊を苦悶死させた 2 事例

*1977 年 4 月 30 日朝日新聞の記事写真を掲載

① 朝日新聞 1977 年 4 月 30 日の、「発信器付けた熊が死んでいた」の記事

北大天塩地方演習林長の滝川貞夫氏と 同大熊研究グループの学生らが、冬眠中の明け 3 歳(満 2 歳 3 ヶ月令)の熊に、わが国で初めて無線発信機をつけるのに成功、冬眠が明けて動き出すのを待っていたが、この熊は電どけの穴の中で死んでいた。いつまでたっても出てこない熊に対し不審に思った学生らが 25 日に穴をのぞいてわかった。札幌の北大獣医学部へ運んで解剖したが、死因は栄養失調ぎみのところを冬眠からたたき起こし、麻酔を注射したためのショック死らしい。同研究グループは、2 月 14 日、冬眠中の熊の穴を取り囲み、鉄製の檻の中に追い込んだ。当時の体重は 38 kg。母親から独立して初めて一人寝の冬を越したところ。5c.c の麻酔薬を注射し眠っている間に無線機を仕込んだ首輪をつけ、目印の黄色のペンキを背中に塗って再び穴に戻した。

その後、この熊の行動を監視できる態勢をとっていたが、熊は、穴に戻されて 4、5 日で死んだらしい。麻酔薬で苦しんだとみえ口を開け、舌をかみ切っていた。早速他の熊を捜し再び発信器を着ける予定と言う記事。〈門崎の批判〉 冬籠もり中の熊は代謝機能が低下しているので、麻酔は勿論、発信器など絶対に装着すべきでないのに、己の好奇心を満たす事と初めて為すと言う銜いに駆られ為したと批判したい。「舌を咬み切る程の苦悶＝如何程七転八倒した事か、如何ほど無念であったか」。

②北海道新聞 1992 年 4 月 30 日の、「発信器付けた熊が括り罠に掛かり、死亡」の記事

網走管内斜里町内の知床国立公園で、昨年(1991 年)発信器つけて放した熊が前足に括り罠のワイヤが巻き付き、木にからまって宙づり状態のまま死んでいたと言う記事。

発見したのは同町知床自然センター研究員の山中正実(33 歳)。熊は若いオスで昨年 9 月 20 日、山中正実が電波発信機を付けて放した。昨年 10 月末から位置が動かなくなり、冬眠した可能性もあるため、今月まで近づかなかったが、このほど電波を頼りに探し当てた。現場は斜里町幌別地区の知床横断道路から、約 400 m の広葉樹の町有林。ブドウ蔓に絡んだワイヤの先には前足の骨だけが残りに、根元にばらばらになった頭骨や脊椎骨、熊の皮などが散らばっていた。ワイヤは骨がえぐれるほど深く食い込み、「かなり長期間もがいたらしい。自分で足を咬み切ろうとした跡もある」と山中は言う。現場から 1 km ほど離れた国立公園区域外の国有林と民有林には多数の括り罠が仕掛けられており、その罠に掛かり、そのワイヤを引きずって逃げて来て、ブドウを食べようとしたらしい。と言う内容。〈門崎の批判〉足を咬み切ろうとまで、精神的に追い詰めた行為、熊の心情になってみよと言いたい。全く許せない行為である。この熊はどれだけ精神的肉体的に苦悶し、山中を恨んで死んだ事か。熊が冬籠もりを始めるのは、早い熊で 11 月中旬以降である。10 月に、冬籠もりを始めたとすれば、論文にし得る新知見の価値がある。なぜ、検証に行かなかったのか。行って発見し、麻酔し、ワイヤを外し得れば、救出し得た可能性もあったろうに。北海道新聞 1992 年 4 月 30 日の、「発信器付けた熊が括り罠に掛かり、死亡」

(丁)